

未来において、もしもペンケ沼が汚染してしまったら、その時はペンケ沼とパンケ沼とを、何らかの方法で遮断するにしくは無い。

#### 文 献

- 1) Hoek, C. v. (1963) : Revision of the European species of *Cladophora*. Brill, Leiden.
- 2) 神田房行 (1978) : シラルトロ湖のマリモについて. 藻類 27, 39-44.
- 3) —— (1978) : 日本におけるマリモ及び類似藻類 II. 釧路市郷土博物館々報 253, 123-125.
- 4) ——・大滝末男 (1976) : マリモの新産地達古武沼. 植物と自然 15 (1), 17-19.
- 5) 菅野利助 (1934) : 日本産マリモの研究, 主として其球形集団に就て. 日本水産学会誌 2, 217-228.
- 6) Kozhow, M. (1963) : Lake Baikal and its Life. Junk, The Hague.
- 7) Lorenz, J. R. R. (1901) : Ergänzung zur Bildungsgeschichte der sogenannten "Seeknödel". Verh. K.K. zool.-bot. Gesell. Wien. 51, 363-368.
- 8) Nakazawa, S. (1973) : Artificial induction of lake balls. Naturwiss. 60, 481-482.
- 9) —— (1976) : Distribution of lake-balls considered from experiments. Bull. Yamagata Univ. Nat. Sci. 9 (1), 75-83.
- 10) 中沢信午 (1971) : 左京沼のヒメマリモ. 遺伝 25 (12), 53-56.
- 11) —— (1974) : ツェラー湖におけるマリモ絶滅の時とその原因. 藻類 22 (3), 101-103.
- 12) —— (1976) : マリモはいかにつくられるか. 科学の実験 27 (4), 277-285.
- 13) —— (1978) : シラルトロ沼のマリモ. 遺伝 32 (7), 94-96.
- 14) —— (1979) : 山中湖のフジマリモ. 遺伝 33 (5), 38-40.
- 15) —— (1981) : マリモはなぜ丸い? 水草研究会報 No. 6, 1-2.
- 16) ——・安部守 (1973) : 藻類の人工球化. 藻類 21 (2), 53-56.
- 17) Sakai, Y. (1964) : The species of *Cladophora* from Japan and its vicinity. Sci. Pap. Inst. Algol. Res. Fac. Sci. Hokkaido Univ. 5 (1), 1-104.
- 18) Sauter, A. (1824) : Bericht über einige botanische Exkursionen durch Oesterreich, Steinermark und Salzburg. Flora Nr. 14, 209-217.
- 19) Schröder, B. (1920) : Über Seebälle. Naturwiss. 8, 799-803.
- 20) 館脇操 (1952) : マリモ調査報告. マリモ専門委員会刊行.
- 21) 黒木宗尚編集 (1976) : 特別天然記念物阿寒湖のマリモの生息状況と環境. 阿寒町発行.

OK. R. Reddy and W. H. Smith ed. "Aquatic Plants for Water Treatment and Resource Recovery" (Magnolia Pub., Florida, 1987, 1032p.)

1986年7月、フロリダで開催された水処理と資源再生を目的とする水生植物の研究と利用に関する国際会議で発表された論文集。82篇の論文と65の要約が集録された大部のものである。登場する水草はホテイアオイやウキクサから沈水植物、藻類まで幅広い。湿地というシステム（自然、人工を問わず）が環境改善に果たす役割を報告した論文も、水辺の問題を考える上で無視できない。水質浄化に水草を利用した実際例、水草の生理生態、物質循環、他と内容が多岐にわたっていて限られたスペースではとても紹介できないが、表記のタイトルに直接あ

るいは間接に結びつく話題は、ほとんど網羅されているとよい。なお日本からは沖陽子（岡山大）・植木邦和（京都大）両氏の "Biomass production of water hyacinth cultured in an aquaculture system in Japan" と題する報告が寄せられている。

○『群馬県植物誌改訂版』（群馬県高等学校教育研究会生物部会、昭和62年3月、604頁、頒価5,000円）

この植物誌は高等植物だけでなく蘚苔類や藻類も含み、県下の植物的自然を詳細に記録したものとなっている。高等植物に関しては、植物相だけでなく植生についても現在の群落体系にそって詳しくまとめられている。植物目録は、産地、生育環境、産量を記したもので、水草だけは拾っても興味深い。（角野康郎）